



受け継がれる伝統

## 今諏訪の御柱祭

「聞いてござんよー 木遣りの歌を 柱に宿る神の声」



伝統と思いを受け継ぐ



【右頁写真】里曳きのようすと木遣り衆の方々

【左頁写真】(上段右上) 昭和7年の様子。法被に若葉会の文字が見えます。お囃子の若葉会は現在も活躍中です(白根町発行「夢21世紀への伝言」より、中島節子氏所蔵)。(上段左) 御柱の宮に建てられた上今諏訪の御神木。(そのほか) 今回の祭典の風景から

春風に舞う桜の花びらにのせて、4月3日、今諏訪の地に木遣り歌<sup>\*</sup>が響きました。「それー、よーいとな、よーいとな、よーいとな!」歌に続く掛け声で、大勢の氏子がいっせいに綱を引き、御神木を曳き歩きます。

数えで七年に一度、寅年と申年に行われる

上今諏訪地区、下今諏訪地区、両諏訪神社の御柱祭。両社とも御柱祭の本場信州諏訪大社から勧請<sup>\*\*</sup>したと言われています。県内には一

二〇〇社以上の諏訪神社がありますが、里曳きをして御神木を建てる御柱祭が行われるのはこの今諏訪だけなのです。諏訪神社周辺には、春宮、秋宮、中島社(雨宮)、角力場など信州諏訪大社と同じ社が立ち並び、かつては「穂屋祭」や「御射山祭」など共通する祭までも行われていて、諏訪大社との強い結びつきがうかがえます。



『甲斐国志』には、七年目ごとに諏訪神社

境内の木を伐って御柱社に建てる「御柱ノ神事」が延宝八年(一六八〇)まで続いたとされる記述があり、古くから祭が行われてきたことがわかります。これ以後、一度途絶えましたが、幕末の史料を見ると江戸時代末に復活し、現在までずっと続けられてきました。

現代の祭では、御神木とともににお舟やお神輿、万燈、山車などが行列を組んで里中をねり歩き、最後に御柱ノ宮で、向かって右側に上今諏訪、左側に下今諏訪の御神木が建てられ、神事を行って祭の幕が降ります。

「力を合わせ、御柱祭(みはしまつり)を盛り上げる。それ!」大人の木遣り歌。それに続いて拍子木を叩き、金棒を突き鳴らしながら、「やつせい、やつせい、やつせい、いやさかさー」と答える子供たち。その傍らでは御神木を曳く大人の後ろ姿を少年は眩しそうに見つめていました。祭の伝統とそれに込められた思いは、祭を通して次世代に受け継がれていました。

\*やっせい:わっしょいと同じ掛け声。

\*\*いやさか(弥栄)はますます栄えること。繁栄を祈って叫ぶ声。

※民謡の一つで、大木などを大ぜいで運ぶときにうたう仕事歌。ひくときの合図と氏子の心を一つにする役割がある。

※よーいとな:「よいと」は神輿などを上げ下ろしする時やゆっくり進ませる時に使う掛け声。

※神仮の靈を分けて他の場所にまつること。